

Janik's Friends Meeting に参加して

大学院重点化・外部評価・独立行政法人化・・・，そのために頻繁に開かれる会議と膨大な資料の準備。大学人にとって今ほどめまぐるしく翻弄されている時代は無いのではなかろうか。競争原理の導入と勝者に与えられる巨額な研究費と研究の拠点化。悪いことではないが、競争に勝つためにはどうしても実用化が見える応用研究やプロジェクト研究が幅をきかせることになる。理学を志している人の多くの価値観は必ずしも現在の風潮には合致していない。自分達の研究活動がいずれ人類の知的遺産に寄与するのであれば、なにもショートタームの実用成果が出なくても良いと考えている。息苦しい日常から抜け出せないかと考えていた折、格好のチャンスが訪れた。ポーランドの Jerzy Janik 教授から“Janik's Friends Meeting”への招待を受けたのである。

“Thinking about truth rewards you” というキャッチフレーズで企画されたこの会議には、自然科学・社会科学・人文科学の分野から同伴者を含めて 46 名が招待を受けて参加した。スロバキアとの国境に近い山岳保養地ザコパネのホテルで 7 月 8 日午後から 13 日夜までの丸 5 日半を、寝食を共にしながら幅広い分野からの話題に自由な意見を交換しあった。1950 年代後半から 2～3 年毎に開催されてきたこの会議の本来の目的は、旧ソ連のドゥブナにある原子炉の中性子線を用いた回



折・非弾性散乱実験の研究者の研究会であった。中心になって世話をされたのがクラクフにある核物理研究所の Janik 教授である。同教授は現在 72 歳であるが、退職後も研究会をアカデミック・サロン風に変えて続けておられる。今回の参加者は多い順にポーランド(27 名)、ノールウェイ(6)、ロシア(2)、ドイツ(2)、米国(2)とベルギー、フランス、イスラエル、日本、オランダ、ウクライナ、ヴェトナムから各 1 名であった(写真参照)。

朝 9 時から午後 1 時 15 分迄が講演と討論で、午後は実にゆったりとした自由時間を皆で楽しんだ。夕食後は同伴者も交えてのセッションで、共通性の高い話題提供があり、その後はワインやウォトカを飲みながら深夜まで自由な会話が続けられた。雰囲気伝えるために少し紹介すると、たとえば午前のセッションでは 1973 年に江崎玲於奈および Josephson と共にノーベル物理学賞を受賞したノールウェイ生まれのアメリカの物理学者 Ivar Giaever の紹介と分析、最近の分光法の発展と星間物質の化学、宇宙の終焉と天体物理学、社会科学における数学モデル、非線型社会動力学と均質社会構造に導く集団的選択の原理、固体 C_{60} のポリマー相と C_{60} のインターカレーション化合物、スピンのクラスター化とスピングラス挙動、相転移を擬した簡単な力学モデル、電荷移動分子固体における光誘起協同現象、磁場処理した活性化シリカによる工業用水の改良などである。ちなみに私は低次元磁性体のカロリーメトリーに基づく研究紹介を行った。夜のセッションでは同伴者も話に加われるように、液晶の光学模様：物理と芸術、ポーランドのノーベル文学賞受賞者シンボルスカ (W. Szymborska) の紹介と詩の朗読、ヨーロッパ連合の中でのポーランドの大学の在り方、物理学者と哲学者は実在に対して共通の描像を生みだせるか、などである。

私は 1973 年にインドのバンガロールで開催されたラマン研究所設立 25 周年記念の液晶国際会議で初めて海外を経験した。私はガラス性液晶の発見について講演したが、執拗に議論をふっかけてこられたのが Janik 教授であった。以後、長いおつきあいをさせていただき、最近は政府間協定による日本・ポーランド科学技術共同研究を当センターとクラクフ核物理研究所の間で行っている。それが機縁で今回招待を受けることになった。経済的には豊かだがかくもせわしい日本と、アカデミック・サロンで心の豊かさを楽しめるポーランドとを比較し、何が本当の豊かさなのだろうかと考えさせられたことである。

(徂徠道夫)